

# ACCU news

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

特集1 ESD Global Action Programme

## GAPが最終年を迎える……2

特集2 ひろがる、つながる、ACCU 交流の連鎖～教職員国際交流にて～……6

中国政府日本教職員招へいプログラム……8

韓国政府日本教職員招へいプログラム……8

Bangladesh・インドネシア・パキスタンに対する日本との協力による教員交流支援プログラム……9

第1回ワーキンググループ会合……9

SDGsカリキュラム・教材開発のための検討会……10

文化遺産の保護に資する研修(個別テーマ研修)……10

活動メモ……11

Pick up Information……11

No. **409**  
2019年10月号



ACCU

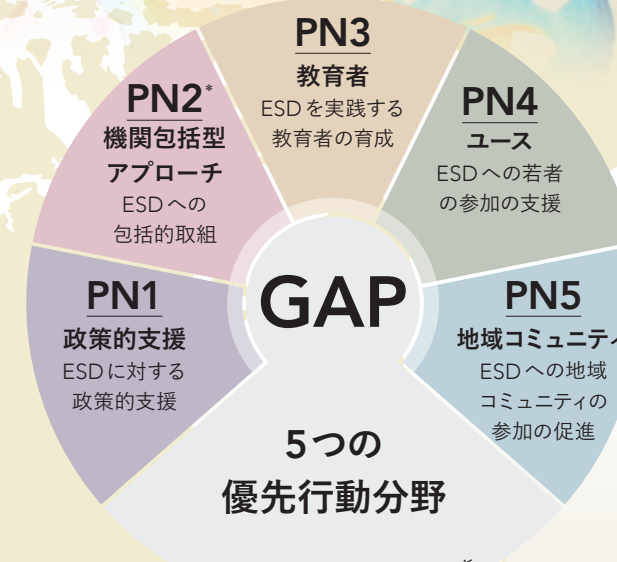
Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター 発行



# ESD Global Action Programme GAPが最終年を迎える

「国連ESDの10年」の後継プログラムとして始まったGAP<sup>\*1</sup>、このプログラムは2014年11月に愛知・名古屋で開催された「ESDに関するユネスコ世界会議」にて正式に発表され開始となりました。期間は2015年から2019年の5年間です。ユネスコが主導機関となり5つの優先行動分野（①政策的支援、②機関包括型アプローチ、③教育者、④ユース、⑤地域コミュニティ）を設置し、各優先行動分野を牽引するGAPのキーパートナーが採択されました。ACCUもキーパートナーの一員として、機関包括型アプローチに取り組んできました。世界各地に点在する各キーパートナーが物理的に集まる機会は大変限られています。これまでの5年間、年に1度GAPの会合が実施されました。初回と2回目はユネスコパリ本部で、中間レビューとなった3回目はカナダ・オタワにて、4回目はコスタリカにて、そして今年7月に最終年の会合をベトナム・ハノイにて開催されました。ハノイ会合では、パートナー団体の活動状況を共有しつつ、これまでの5年間を優先行動分野毎に振り返り、成果と課題を確認し、ESDの今後の方向性について、そしてポストGAPの枠組みについて意見交換をしました。



## GAPキーパートナーとしての5年間 ～ ACCUが大事にしてきた3つの視点～

教育協力部 若山 洋子

ACCUは、ユネスコのGAPキーパートナーとしての5年間、主に次の3つの視点を意識して活動してきました。第1に、日本国外におけるESDの実践から学び、国際的な地平から国内の取組を活性化させていくことです。その中心となったのが、2016年9月、ユネスコスクール・ネットワークのフラッグシッププロジェクトとして始動した「気候変動をテーマとしたホールスクールアプローチ実践プロジェクト」です。このプロジェクトは、学校全体で地球規模の課題に取り組み、

その経験と成果を国内外の学校と共有して学び合おうというものです。ユネスコスクール事務局を10年近く担ってきたACCUは、本プロジェクトの日本国内コーディネーションを任されることとなりました。プロジェクトの枠組みは極めてシンプルです。「スクールガバナンス」「指導と学習」「設備と運営」「地域との連携」の4つの領域から組織全体を見直し、気候変動に対処する具体的な行動計画を立てて実践するのです。日本から10校のユネスコスクールが参加し、そ

れぞれの特色を生かした素晴らしい取組を、わずか1年半という限られた実施期間の中で次々と実現していきました。また、海外からゲスト講師をお招きし、国際ESDワークショップを3年にわたり開催するなど、日本の教育関係者がその実践に直接触れ合う機会を設けることにも尽力しました。

第2に、上述の国際プロジェクトから学び取り入れた枠組みを、日本国内の環境に合わせ、より実践的なツールに仕上げることで、日本国内における汎用性を確保することです。事業実施過程で開発された「ホールスクールアプローチ・デザインシート<sup>\*2</sup>」は、24校のサステナブルスクールが校内の研修材料として、コミュニケーションツールとして、中長期的なプランニングツールとして活用してきました。3年にわたる変容の記録は3

部構成の冊子『キラリ発信！サステナブルスクール』として広く配布され、日本各地におけるESD研修会やユネスコスクール全国大会などでも、その手法と成果は積極的に共有されました。

第3の視点は、国内で培われてきた実践知を、今度は国外へ向けて発信していくということです。GAPパートナーとしての度重なる調査協力はもちろん、世界各国のユネスコスクールやナショナル・コーディネーター<sup>\*3</sup>を対象としたUNESCO主催のWebinar（オンラインセミナー）での発表や、ACCUの強みである国外のネットワークを活用した広報など、自主事業を通じてその経験を海外に発信していくことにも継続的に取り組んできました。

ESD国内実施計画において「機関包括型アプローチ（ESDへの包括的取組）」

とされているGAPの優先行動分野2は、UNESCO策定の英語版ロードマップにおいては「学びの環境を変容させる」と直訳できます。ACCUが日本と国外の取組、先生方をはじめとする実践者をつないでいくことで、間接的にでも学びの環境が変容し、学びそのものの変容につながる芽を育てることに貢献出来たならば幸いです。



UNESCO Global Action Programme on Education for Sustainable Development

ACCUは機関包括型アプローチでのキーパートナーです。また、他の優先行動分野に係る教育者の育成やユースの支援にも積極的に取り組んでいます。

\*1 GAPとはESDに関するグローバル・アクション・プログラムのこと。  
\*2 「サステナブルスクール」2016年に全国公募を経て、ESDに継続的に取り組み、そしてさらなる飛躍のポテンシャルがあると評価、選定された24校。取組の詳細については、ACCUおよびユネスコスクール公式ウェブサイト参照。  
\*3 「ナショナル・コーディネーター」は各ユネスコ加盟国に設置され、ユネスコスクールの国内コーディネーションを担う。



# キーパートナー団体と共に歩んで GAP最終年を迎えて——。

ACCUと同じGAPの優先行動分野2：機関包括型アプローチのキーパートナー団体（Partner Network：PN2）の3名に、メールインタビューを行いました。お答えいただいたのはPN2をこれまで先頭に立って主導してきたCarolee Buckler氏（Manitoba\*、Canada）、Ann Finlayson氏（SEEd、United Kingdom）、Jim Taylor氏（WESSA、South Africa）の3名です。まとめてご回答頂いた中から、一部ご紹介致します。



Carolee Buckler氏(右)、  
Jim Taylor氏(中央)、  
Ann Finlayson氏(左)

——ESD-GAPのこの5年間、優先行動分野2「機関包括型アプローチ」のパートナー団体（PN2）としての振り返りをお願いします。

まずは、沢山の新しいパートナーシップが形成されました。それと同時に既存のプロジェクトもますます強化される実りある5年であったと言えます。

——具体的にはどのような成果がありましたか？

持続可能な開発目標（SDGs）達成に向け多くの取組や進歩がありました。複数の関係者が手を携えて実践を通じた学びを進めていく手法（Co-Action Learning）は、特に大きな成果につながったと考えます。例えば、清潔な水、健康的な食べ物、きれいな空気や廃棄物管理といった持続可能性に関わる地域の課題解決へ向けて、地域住民自らボトムアップの活動を始めた例があります。彼

らは、ソーシャルメディアを活用して地域の隅々にまでコミュニケーションを図り、また地元政府とも良好な関係を築いていきました。あるいは、ESDに対する政治のコミットメント強化を目的として、リーダーシップ・セミナーのような研修会の機会を作っていくことにも尽力してきました。そうすることで、ESDの推進を進めやすい環境が整ってきたと感じます。

——ESDを通じてSDGs達成を目指していく、これからの10年に何を期待しますか？

今後もこの5年で築かれたGAPのパートナーネットワークを活用し、各々の国で、あるいは国、地域を越えてあらゆる連携を図っていくことが、ゴール達成に向けて最も効果的だと考えます。また、優先行動分野の枠を超えた連携もますます重要になってきます。

——最後にACCUそしてACCUNewsの読者に向けてのメッセージをお願いします。

The Global Action Programme (GAP)はESDを通じてSDGsの達成を推進する非常に有効な実行計画です。特にACCUの活動にも関わりのある以下の点で効果が発揮されています。

- 既存の（これまでの）プロジェクトに積み上げる形でESD推進の取組を深化させている
- アクション・ラーニングの教授法を活用し、実践に重きを置いている
- ホールスクールアプローチ（あるいは機関包括型アプローチ）の視点に基づいた取組を進めている

PN2メンバーとしては、ESDを推進していくことの重要性を更に実感した5年でした。期間中に行われた2回の調査活動でもその事が明らかにされており、効果的な推進に向けて以下の要因も示さ

れました。

1. 機関包括型アプローチはESDを通して社会を変えていく上で最も効果的な方法であり、推進にあたっては様々な環境で応用可能な、身近な教材があるということが大事である。
2. プロジェクトは机上の空論ではなく、実践的な内容、即ち私たちが生活している場で活かせる内容であること。
3. プロジェクトの成功には、情報発信をすること、そして複数の関係機関で取り組むということが大きな効果にもつながる。

最後に、更なるESDの推進に向けたACCU職員、そしてACCUNews読者の皆様のご健闘をお祈りしています。

\* Manitoba Education and Training, Canada  
\* Sustainability and Environmental Education (SEEd), United Kingdom  
\* Wildlife and Environment Society of South Africa (WESSA), South Africa  
写真はUNESCOより

## GAP最終年 ハノイの会合レポート

国際教育交流部部長 進藤 由美

ハノイ会合を終えて、日本におけるGAPパートナー関係者会合を国連大学サステナビリティ高等研究所の声かけにより実施しました。優先行動分野の枠を超えての意見交換の場において、日本でのネットワーキングを深めることにつながる良い機会となりました。Education for Sustainable Development(ESD)の推進に終わりはありません。持続可能な社会づくりを目指して、ユネスコではポストGAP（2020年から2030年）に向けた新たな枠組「ESD for 2030」を計画しています。次の10年間は、2030年までに達成すべきSDGs（持続可能な開発目標）の10年間と連動しています。ACCUも他のパートナー団体と共に、新たな枠組により貢献度の高いものになるようESDを推進していきます。



ハノイ会合の様子





# ひろがる、つながる、ACCU交流の連鎖

## ～教職員国際交流にて～

約20年の歴史を持つACCUの教職員交流プログラム事業。この事業の招へいや派遣での人や知識の出会いが「波紋」のように、新たな出会いや交流の流れへとつながっています。この特集では「波紋」に焦点をあて、ACCUでの出会いが波となり、人や場、そして知識をつなげ、新たな視点や価値観へも広がりを見せていく素晴らしい事例をご紹介します。

伊豆諸島の1つである利島としま。この島の利島小中学校の高橋健志校長先生が以前在籍されていた狛江市教育委員会で、外国につながる子どもたちの支援や教職員招へいプログラムでACCUとの縁があったことから今回の交流につながりました。

### 利島の小さな地球市民との学び

国際教育交流部 高松 彩乃

「利島にはどうやって行くのだろう？」利島小中学校から国際理解をテーマとした講義のお話をいただいたとき、最初に頭に浮かんだ疑問です。一泊する必要があり、天候によっては大島でヘリコプターに乗り換える場合もあることを知り、驚くとともに、ACCUに声をかけていただいたことを嬉しく思いました。

ACCUの教員交流プログラムでは、様々な国や地域の先生が訪問先の学校で授業を行い、自分の国の学校のことや子どもたちの遊びなどを伝える交流活動を行うことがあります。私自身は子どもたちに「外国の方と直接会う」インパクトを与えることはできませんが、これまで一緒に外国の先生が日本で行った授業で興味深かった内容、私自身が学んだこと

を紹介しながら、「国際理解」「国際交流」を感じて、体験する時間になればと3時間の授業を準備しました。

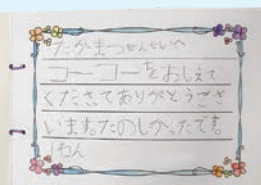
後日、利島から送っていただいたお手紙からは、私の意図した以上に多くのことを吸収してくださったことが伝わってきました。利島の中では外国の人や文化に触れることが日常的でなくとも、国際的な感覚をもったひとりの地球市民として、利島を含むそれぞれの場所で活躍していかれることを願っています。



**利島って？**  
東京から約140km南に位置した、面積4.12km<sup>2</sup>の小島。海ではイルカと一緒に泳いで遊ぶドルフィンスイムができ、山はヤブツバキに覆われ、一年中青々とした景色を見ることができます。



学校風景



### ACCUとの道徳公開講座を振り返って

東京都利島村立利島小中学校 校長 高橋 健志

——利島小中学校の概要や代表的な取組を教えてください。

**高橋校長** 利島小中学校は、小21名、中15名が通う小中施設一体型の島内唯一の学校です。檜原村小中学生とのサマースクールや中2の豪州留学は村の事業として、また運動会や文化祭は村全体の行事でもあり、教職員と村全体で子供たちを育てている学校です。

——国際理解をテーマとした道徳授業地区公開講座をACCUにお声をかけてくださったいきさつなどを教えてください。

**高橋校長** 国際理解について、体験的な具体例を交えて分かりやすく説明して下さる講師を探していました。私が狛江市教育委員会に在籍していたとき、日本語指導員をACCUから紹介していただいた縁があり、また、アジアの国々との交流が深いことも知っていたので、お声をかけさせていただきました。——ワークショップや授業を受けての反応はいかがでしたか？

**高橋校長** 4年生までのワークショップでは、インドのコーコー(KOHKOH)を教わり、児童も楽しみながら取り組めていました。5年生以上の小中学生は、外国の学校の様子やインド式かけ算を紹介してもらいました。日本とインドの学校生活の違いに驚き、さらに、講演会のお話を聞くことで、お互いを理解することの大切さも感じたようでした。また、当日の午後5年生は「少数のかけ算のテスト」でしたが、「インド式でも良いですか」の声が上がり、興味関心の高さがうかがえました。——今回の授業を受けて、これから国際理解の分野で学校として挑戦したいことがあれば教えてください。

**高橋校長** ALTが島在住で、毎日英語の授業で語学と外国の文化を学び、小1から英語に親しんでいます。

島内で英語を話す機会は授業以外にはほとんどないので、外国の同年代の子供たちや大人の方々と小中学生が話す機会を作りたいと考えています。



### 韓国派遣

### 今でも韓国と続く温かい交流

神奈川県横浜市立永田台小学校 教諭 飯干 望

ジュヨン先生とのホームビジット先での出会いが、今でも続くことになるとは、思っていませんでした。なぜ、今も続いているのか。それは、「無理のない交流をしようね」とお互いに話をしていたこと、そして、子どもたちの交流が「持続可能な明るい未来をつくっていく」という共通認識があるからです。活動はいつも子どもたちの思いを大切にします。「メサン小学校のお友だちに何を伝えたい?」と聞かされると、「学校生活、日本の遊び…」など沢山のアイデアが出ます。それをジュヨン先生に伝え、相談します。いつもやり取りは気軽に連絡できる「カカオトーク」です。交流2年目は

自己紹介カードから始めました。韓国からは伝統的な遊びの紹介ビデオレターと共に、実物も送られてきました。今年は3年生になった子ども達は、新しく学んだ習字や社会科でのまち探検で発見した、自分の住んでいるまちの様子を紹介したいと話しています。何か新しく始めるのではなく、日常の学習や生活の中での自然な交流が日本と韓国の子どもの心を近づけています。

すぐに韓国の伝統的な遊びに挑戦している子どもたち



### 交流感想とメサン小の子どもたちの変容

この交流は自分たちが韓国の伝統文化を学ぶ良い機会にもなっています。韓国の子どもたちは国際交流を通じて日本をより身近に感じ、日本の生徒さんが送ってくれたビデオを見て簡単なあいさつを真似たり、日本の友だちが送ってくれた写真をとても喜んで見せています。このように近くの人同士、お互いの文化を楽しみ合うことが、将来大切な役割を担う子どもたちの輝かしい未来につながることを期待しています。



飯干先生(右から2人目)とジュヨン先生(左)



送られてきたポスターと共にお礼のビデオメッセージ撮影している永田台小の子どもたち

### 中国派遣

### 私を変えた1週間

徳島県上板町立高志小学校 教諭 富樫 未来

私にとって初めての海外が、この中国派遣プログラムでした。参加のきっかけは、学校長の「世界を見てきなさい」という一言でした。

中国では見るもの全てに衝撃を受けました。最先端の設備、各分野でのプロフェッショナルな授業など新しい価値と出会うことで「日本という枠組の中だけでは、これからの社会で力を発揮することができない!」ことを強く感じました。それからは、「総合的な学習の時間」でゲームソフト「マイクラフト」を使って自分たちの未来の町を作ったり、海外から藍染めの修行に来ている人たちとコミュニケーションができる場を作ったり

して、自分の価値観が広がった教育活動になった気がします。そして、そのような活動の中にこそ、子どもたちの学ぶ意欲が見えてくるのが分かりました。今年は、昨年度の取り組みを踏まえて、徳島の地場産業である藍染めを世界に発信する活動を子どもたちと計画しています。自分の置かれた状況に満足していた私を、新たな世界へ踏み出させてくれた学校長、ACCUの皆様、関係者の皆様には本当に感謝しています。これからも、子どもたちの笑顔と共にたくさんの価値と出会い続ける毎日を送っていききたいと思います。

### 校長先生から見た富樫先生の変容

最大の変化は創造性を求めるようになったことです。悩んだら本を読み、地域関係者を訪問し多様な側面から学んでいます。世界の動向から、自分の教育の方向性を模索し、まさに徳島のSDGs推進リーダーとしての成長がみられます。



高志小学校 武田 國宏校長



\* KOHKOH: 鬼ごっこに似た、インドの遊び



中国政府日本教職員招へいプログラム

# 多様な文化に触れる取組

国際教育交流部 伊藤 妙恵

中国政府の招へいにより初等中等教育に関わる日本教職員25名が中国の6つの学校と2つの世界遺産を視察しました。

訪問先ではESDやSDGsの文脈で教育政策や授業実践が説明されることはありませんでしたが、グローバル化や環境問題を意識してカリキュラムが組まれていました。その1つに今回の訪問で強い印象を残したのは、多文化理解促進の取組です。

26の少数民族が住み、ミャンマー、ベトナム、ラオスと国境を接する雲南省で訪れた小学校2校、高等学校、盲啞学校では少数民族や海

外につながる子どもも通っています。各校で少数民族の音楽や踊り、楽器、伝統文化を授業に取り入れ、民族の知恵や美意識を養っています。昆明市書林第一小学校では毎週金曜日に児童生徒が自分の民族衣装で登校し、お互いの文化を紹介し、学び合う機会があります。また、芳草地国際学校では中国語の学習や中国の伝統的な行事を教育課程に含めたり、「国家文化週間」として、海外につながる子どもたちの文化や習慣を学ぶ機会も設けています。

少数民族の文化は家庭で学ぶことが多いということですが、学校にお



少数民族「イ族」の文字が併記されている教科書の一部

いても、各民族固有の文化を大切に守りつつ、他の文化に触れ理解する機会を創り、互いに尊重し合う環境づくりをしていました。

中国ではすべてが中央政府によるトップダウンでなく、各地域の特色や特性を生かしたさまざまな教育が学校単位で実践されています。

DATA
訪問期間：2019年6月9日(日)～15日(土)
参加者：25名
訪問場所：北京、雲南省、上海

韓国政府日本教職員招へいプログラム

# 信頼関係を築けた有意義な交流

国際教育交流部 藤澤 弥生

ACCUは多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現を目指し、国々の相互理解と友好の促進のために、教職員の国際交流事業を日本と韓国・中国・タイ・インドとの間で実施しています。今回で19年目となる韓国派遣プログラムを7月に実施し、50名の日本教職員からなる訪問団が韓国の学校や教育委員会を訪問しました。

日韓の政情が芳しくない時期の訪問でしたが、韓国の人々はとても温かく、中には日本の国旗を校庭に掲揚して歓迎してくれた学校もありま

した。学校訪問では日本の先生が異文化理解の授業を行う機会もあり、日韓の文化の違いや共通点について紹介しました。また、日本と韓国のクラスをスカイプでつなぎ、日韓の生徒同士が顔を見ながら交流して大盛り上がりする場面もありました。多くの日本と韓国の先生方がプログラムを通して出会い、学校間交流や姉妹校締結に向けて具体的に動き出す姿も見られました。

ユネスコ憲章前文には、お互いの文化や事情を知らないことが人々の間に不要な不信感をもたらす戦争に

つながったため、文化の普及や平等の教育が必要であること、また真の平和の実現には政治的・経済的な取り決めだけではなく、人々の知的な、または精神的な連帯の上に平和を築かなければならないという言葉があります。今回のプログラムで改めて強く感じたことがあります。それは、このような時期だからこそ、顔を合わせての交流が信頼関係には大事であり、お互いを知り、理解しようとするのが、平和の精神を子どもたちに芽生えさせ持続可能な世界の実現につながるということです。

DATA
訪問期間：2019年7月9日(火)～15日(月)
参加者：50名
訪問地域：ソウル、水原、仁川広域市、春川



小学校にて、日本の国旗を掲揚しての歓迎の様子

バングラデシュ・インドネシア・パキスタンに対する日本との協力による教員交流支援プログラム

# 教育を通じた持続可能な未来の構築 ～ Learning for Empathy ～

教育協力部 大類 由貴

7月10日(木)から7月14日(日)の5日間、バングラデシュ、インドネシア、パキスタンの教育関係者(教育省担当者、宗教学校及び非宗教的一般学校の学校長、教師)を対象とした教員交流支援プログラムを東京で実施しました。このプログラムは、持続可能な開発目標(SDGs)4の中の特にターゲット4.7の観点から、日本の学校が地域コミュニティと学校の連携や取組について理解を深め、各国の経験も交えて学びあうことを目的としています。

ACCUはユネスコ・バンコク事務所のパートナーとして日本訪問の国内調整を担当しました。

参加者は、授業見学、教職員・生徒との交流を通して、学校現場でどのようにSDGs達成のためにカリキュラムが構成・実施されているか、また、このプログラムのテーマでもある「思いやり」(empathy)はどのように学校現場で育まれているのか意見交換をしました。また、学校と地域の連携や学校運営に関しても、熱い議論が交わされました。

プログラムの最終日には、各国の訪問団が日本で学んだことを自国に持ち帰り実践するための活動計画案も作成しました。

今回のプログラムが各国でどのように展開されていくか楽しみです。また日本においてもこのプログラムが平和で持続可能な未来の構築へとつながっていくことを願っています。

DATA
開催日：2019年7月10日(水)～14日(日)
参加者：約40名
開催場所：東京

思いやり (empathy) とは何か、日本と各国の異文化交流を通じて学びました



第1回ワーキンググループ会合

# コレクティブな学びと協働で持続可能な地域社会を目指す

教育協力部 若山 洋子

持続可能な地域社会を実現するための協働とそれを促す学びの形とは——これはACCUがコレクティブ・インパクト<sup>\*1</sup>の概念に着想を得て、今年度新たに手掛ける国際ESD事業の主要テーマ<sup>\*2</sup>です。学校教育、ノンフォーマル教育、自治体、市民社会、企業等、特定の地域を共有する様々なアクターが「持続可能な地域づくり」という共通の目的を掲げて活動するとき、どのような学びと協働が生まれ、どのように地域課題の解決に資することができるのでしょうか。「持続可能な地域づくりを推

進する学びの共同体構築支援事業」と題する本事業では、アジア各国のNGOと手を携えて様々な事例を収集し、学びを中心に据えたフレームワークの作成と実践を目指します。

まずは7月末、バングラデシュ、インド、フィリピンからパートナー団体代表を迎え、第一回ワーキンググループ会合が開催されました。コレクティブ・インパクトと協働ガバナンスの先行枠組みを叩き台に、各団体がこれまでのプロジェクト運営で培ってきた実践知を共有し合い、地域課題解決のプロセスに主眼

協働ガバナンスと社会的学びを軸に議論を深めました



を置いた活発な議論が展開されました。自治体やドナーとの関わり、単なる「協力」を越えた「協働」への展開、マルチステークホルダーによる共通の理念の模索、中間支援組織の役割など、議論のネタは尽きません。アジア各地の実践知を集結させ、各国NGO一丸となって持続可能な地域づくりに貢献していきます。

DATA
開催日：2019年7月22日(月)～23日(火)
参加者：9名
開催場所：ホテルサンルート有明

\*1 「コレクティブ・インパクト」立場の異なる組織が、組織の壁を越えて互いの強みを出し合い社会的課題の解決を目指すアプローチのこと。2011年にアメリカで論文として発表され、その実践は世界的に広がりを見せている。  
\*2 本事業は、平成31(2019)年度政府開発援助ユネスコ活動費補助金により運営されています。



SDGs カリキュラム・教材開発のための検討会

# 学習プロセスにSDGsを取り込んでいくために

教育協力部 篠田 真穂

持続可能な社会の担い手を育む学びとは、そして真に価値変容を促す学びとは一体どのようなものなのか。7月27日(土)から28日(日)に開催されたSDGsの教材開発に関する検討会<sup>\*</sup>は、この2つの問いからスタートしました。私たちはどのような社会を目指し、学びと教材をつくり出すべきか話し合う中で、18名の参加者は「学びの本質」について深く向き合っていました。そんな姿を目の当たりにし、子どもの頃にこんなにも自分自身の変化に熱心に向き合ってくれる大人と出会っていたら、

きっと学び方そのものが変わっていたらと、改めてより多く子どもたちに質の高い学びの機会を広げていく責任を感じました。2015年以降に、あらゆる場でSDGsが浸透するよう、SDGsに関する書籍や教材が数多く出版されています。SDGs開始から約5年が経ち、学校現場でもあらゆる実践が積み重ねられてきました。その中で、学校の先生が主体的に持続可能な社会をどう理解し、情報の整理選択し、



研修会後、参加いただいた先生方とともに

子どもたちに伝えているのか。学校教員自らがこのプロセスを振り返り、SDGsに関する”教材”を学習に取り込んでいく方法をまとめた1冊が、来年2月に発行されます。ぜひ、楽しみにお待ちください。

**DATA**  
開催日：2019年7月27日(土)～28日(日)  
参加者：18名  
開催場所：東京

<sup>\*</sup>本事業は平成31(2019)年度ユネスコ活動費補助金(SDGs達成の担い手育成<ESD>推進事業)にて実施しております。

文化遺産の保護に資する研修(個別テーマ研修)

# 博物館収蔵品の記録と保存活用テーマ研修の開催

文化遺産保護協力事務所 中井 公

奈良事務所では、文化庁・奈良文化財研究所との共催で、「博物館収蔵品の記録と保存活用」をテーマに、標記の研修を開催しました。

当該テーマの研修は2015年に開始5回目になりますが、今回は中央アジアの地域の3か国から研修生を迎えました。

この研修の大きな特徴は、参加者の要望に沿ったオーダーメイドのカ

リキュラムが構成できることと、条件が合えば英語以外の研修用語でも開催できることです。

研修の中身は、①展示手法、②収蔵品(土器・金属器)の保存修復、③記録法(3D・写真)、④普及教育活動、と多岐にわたり盛り沢山でした。また、中央アジアでは英語が話せる人は少なく、今回久しぶりに、ロシア語で行った研修となりました。連日35度の猛暑の中で、参加者の皆さん、実習主体の日程を精力的にこなしました。

また、地元奈良のメディアも関心

を寄せ、研修生たちは期間中に何度か取材も受けました。キルギス国立博物館の学芸員・ヌリザットさんは、「新たなエネルギーと知識を得て、とても刺激になっている。これからの仕事に必ず生きてくる」と話していました。

当のヌリザットさんは妊娠7か月目での参加。お腹の赤ちゃんと一緒に奮闘しました。本誌が手元に届く頃には、元気な女の子が生まれていることでしょう。日本での研修の思い出など、いつか話してあげてくださいね。

**DATA**  
開催日：2019年7月24日～8月7日  
参加者：6名(キルギス2、タジキスタン2、ウズベキスタン2)  
開催場所：ACCU奈良事務所、奈良文化財研究所、元興寺文化財研究所、奈良国立博物館、国立民族学博物館、京都文化博物館

撮影実習の様子(左がヌリザットさん)

## 中国政府日本教職員招へいプログラム

①6月9日(日)～15日(土) ②中国教育部、文部科学省、ACCU ③北京、雲南省、上海 ④25名

## SDGs カリキュラム・教材開発のためのワーキンググループ会合

①6月9日(日) ②ACCU ③東京 ④7名

## 高校模擬国連国際大会報告会

①6月23日(日) ②ACCU、JCGC ③東京 ④約100名

## 新モンゴル日馬富士学園高校生来日

①6月24日(月)～29日(土) ③東京 ④5名

## ユネスコESD・GCEDフォーラム

①7月2日(火)～3日(水) ②ユネスコ、ベトナム教育・訓練省、ベトナム・ユネスコ国内委員会 ③ハノイ ④約350名

## GAPパートナーネットワーク会合

①7月4日(木)～5日(金) ②ユネスコ、ベトナム教育・訓練省、ベトナム・ユネスコ国内委員会 ③ハノイ ④約100名

## 韓国政府日本教職員招へいプログラム

①7月9日(火)～15日(月) ②文部科学省、ACCU

③ソウル、水原、仁川広域市、春川 ④50名

## バングラデシュ・インドネシア・パキスタンに対する日本との協力による教員交流支援プログラム

①7月10日(水)～14日(日) ②ユネスコバンコク、ACCU ③東京 ④約40名

## 持続可能な地域づくりのための学びの共同体構築支援事業 第1回ワーキンググループ会合

①7月22日(月)～23日(火) ②ACCU ③東京 ④9名(インド、バングラデシュ、フィリピン、日本)

## SDGsカリキュラム・教材開発のための検討会

①7月27日(土)～28日(日) ②ACCU ③東京 ④18名

## 文化遺産の保護に資する研修(個別テーマ研修)

①7月24日(水)～8月7日(水) ②文化庁、奈良文化財研究所、ACCU奈良事務所 ③奈良、京都 ④6名(キルギス2名、タジキスタン2名、ウズベキスタン2名)

## GAPパートナーネットワーク関係者会合

①8月1日(木) ②UNU-IAS ③地球環境パートナーシッププラザ(GEOC) ④29名

## 金沢大学附属高等学校 SDGs・グローバル課題研究に関する教員研修

①8月22日(木) ②金沢大学附属高等学校、ACCU ③金沢 ④16名

## タイ国政府日本教職員招へいプログラム

①9月1日(日)～7日(土) ②タイ教育省、文部科学省、ACCU ③タイ(バンコク、カーンチャナブリー県) ④9名

## ブラジル ASPnet 全国大会

①9月11日(水)～13日(金) ②ブラジルユネスコスクール ナショナル・コーディネーター ③ブラジル、オーロブレッド ④アンゴラ、カーボベルデ、スペイン、ポルトガル、ブラジル、日本

## 文化遺産の保護に資する研修(集団研修)

①9月4日(水)～10月3日(木) ②文化庁、国立文化財機構東京・奈良文化財研究所、ICCROM、ACCU奈良事務所 ③奈良、兵庫、岐阜、長野 ④15カ国16名(アフガニスタン、ブータン、カンボジア、中国、インド、インドネシア、イラン、ラオス、ネパール、ニュージーランド、フィリピン、スリランカ、タイ、ウズベキスタン、ベトナム)

# 新モンゴル日馬富士学園の皆さんが来日



新モンゴル日馬富士学園創設者の元機綱日馬富士さんと

2019年6月24日(月)から29日(土)にかけて、ウランバートル(モンゴル)にある新モンゴル日馬富士学園より、日本語を学ぶ高校1年生4名と数学科教員1名が、校外研修の一環で来日しました。ACCUのコーディネートで、初日の駐日モンゴル大使館への表敬訪問、翌日の東京都内での教育機関訪問を行いまし

た。モンゴル大使館では、エンヘアマガラン参事官による激励をいただき、一行は真剣な眼差しで話を伺いました。翌日午前中は、グループ校である新モンゴル学園の卒業生も多く通うABK学館日本語学校で、「おいしそう」、「おいしい」、「おいしいですね」等すぐに使える表現を楽しく学びました。午後は、渋谷教育学園渋谷中学高等学校にて同じ高校1年生の英語のディベートの授業に参加、その後は慶應義塾大学三田キャンパスを在学生の案内で見学しました。「モンゴル語と英語と日本語ができるなんて、すごいね!」「大学の勉強は大変だけど、おもしろいよ」等々、日本で学ぶ同世代の学生たちとの温かな交流がありました。一行は、初めての日本の学校、食事、街並み…

ひとつひとつに目を輝かせ、交流を通して友人を得ることができました。それぞれの夢の実現へむけて気持ちを新たにしたいようです。梅雨の晴れ間に、心も未来も明るく照らされるような時間でした。



渋谷教育学園渋谷高等学校1年生の皆さんと授業のあとで

**DATA**  
開催日：2019年6月24日(月)～29日(土)  
参加者：5名  
開催場所：東京